

# イギリス科ニュースレター

July 2019

## 主任挨拶

### 小川浩之

2018年度に続いて、教養学部後期課程地域文化研究分科イギリス研究コースの主任を務めております小川浩之と申します。今年度も、どうぞよろしくお願い致します。

今秋10月19日(土)には、5年に一度のイギリス科同窓会パーティを開催いたします。多くの卒業生の皆さまのご参加を、心よりお待ちしております。

イギリスのEU離脱(ブレグジット)をめぐる問題が、混迷を続けています。2018年11月にメイ政権がEUとの間で合意したEU離脱協定は、2019年に入り、イギリス議会で三度にわたり否決され、5月にはメイが首相辞任を表明するに至りました。私がこの原稿を書いている2019年6月下旬の時点で、保守党下院議員による計5回の投票の結果、後継党首候補がジョンソン前外相とハント外相の二人に絞られ、7月下旬には保守党の議員による投票を経て、新党首(そして新首相)が決まる予定です。現時点では、ジョンソンの勝利が有力視されているようですが、議員投票の結果を予測するのは困難で、現在のところ最長で10月31日まで延期されているイギリスのEU離脱の行方も、依然として不透明なままです。

とはいえ、メイの辞任は、2016年6月の国民投票でのEU離脱派の勝利を受けて、当時のキャメロン首相が辞任したことに続き、イギリス首相が二代続けてヨーロッパ統合との関係をめぐる問題を直接の原因として辞任を余儀なくされたことを意味します。そもそも、第二次世界大戦後、イギリスは、ほぼ一貫してヨーロッパ統合との関係について苦悩を続け、しばしば深刻な混乱を経験してきたように思います。では、なぜイギリスにとって、ヨーロッパ統合との関係はここまで難しいのでしょうか。

その理由のひとつに、イギリスがヨーロッパ外の諸国との間で、歴史的に緊密な関係を築いてきたことがあります。アメリカとの「特殊関係」はよく知られていますが、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど「旧自治領」諸国との関係も、依然として無視できません。そもそも、イギリスの欧州共同体(EC)への加盟が1973年まで遅れた主な原因のひとつにも、イギリスにとって、コモンウェルス(英連邦)諸国との関係の維持と欧州統合への参加を両立させるのが困難だったことがありました。そして現在、ジョンソンをはじめとする「強硬離脱派」の間で、英米関係とともにコモンウェルス諸国との関係をEU離脱後のイギリス対外政策の軸に据えるべきかという意見が目立つことから、旧帝国地域との伝統的関係は、あらためてイギリスとヨーロッパの関係に強い影響を及ぼす要因になっているといえます。イギリスにとって、アメリカや「旧自治領」諸国との関係は、経済や安全保障に関する直接的利益のみに基づくのではなく、自らの文化や伝統、アイデンティティに深く関係するものです。それゆえに、例えばイギリスの貿易の約半分がEU諸国との間で行われるようになった現在でも、それらの英語圏諸国との関係が、イギリスのヨーロッパ諸国との関係の構築や維持を難しくする要因であり続けていると考えられます。

ところが、ここで難しいのは、英語圏諸国との関係は、EU加盟に対する有効な代替選択肢となり得ないと考えられることです。例えば、「ブレグジット」後に向けて、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドと自由貿易協定(FTA)を結ぶ構想が語られることがありますが、それら3カ国の人口は合計しても約6600万人で、フランス一国を少し下回るにすぎず、(特にイギリスが「強硬離脱」一極端な場合は「合意なき離脱」をした際に)EUという5億人を超える規模の単一市場の代わりになるには明らかに不十分です。もちろん、アメリカはそれら3カ国よりもはるかに大きな人口と力を有しており、かつ現在のトランプ大統領は、イギリスのEU離脱を見越して、英米間のFTA

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース  
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

(8号館 402号室)TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)

Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp

Web: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>

締結に非常に積極的です。しかし、EUに対してほぼ常に批判的で、二国間の「ディール」を好むトランプは、戦後のアメリカ大統領の中でかなり例外的な存在で、トランプ後のアメリカ外交は、より「伝統的」なものに回帰することが十分にありえます。また、アメリカと二国間でFTAを結ぼうとする際、イギリスは、例えば、工業製品の環境基準や農産物の安全基準などに関して、十分に厳しい態度で臨むことができるでしょうか。それは、EU諸国が共通通商政策に基づき一体となって交渉する場合と比べて、相当難しいものになりかねません。

予見しうる将来において、イギリスにとってEU離脱が割に合うのは、EU自体が破綻ないし大きく弱体化した場合に、ほぼ限られるのではないかと思います。もちろんそれはあり得ないことではありませんが、そうなれば、ヨーロッパにとって(そしてその地理的、歴史的な一部であるイギリスにとっても)、基本的によいことではないはず。EUが様々な問題を抱えた存在であるのは確かだとしても、そこから離れたところにイギリスが進むべき道がありうると考えるのは、少なくとも現時点では、ナイーブにすぎないでしょう。研究対象としてのイギリスに関心を持ち、繰り返しそこを訪れる中で愛着も抱いてきた者として、「ブレグジット」をめぐる状況を心から残念に感じています。



初夏のイングランドの庭園

## 退職にあたって懐うことども

### 山本史郎

この3月に東京大学を退職しました。定年まで1年残っていましたが、ご縁があって昭和女子大学にお世話になることになりました。駒場からは、1987年に助教として赴任して以来都合32年に渡って給料をもらいました。赴任時は32歳、退任時は64歳になっていたの、ちょうど人生の半分を駒場の教壇に立っていたということになります。このように美しい数字がきれいに並ぶと嬉しくなります。(32は2の5乗、64は2の6乗です。)それはともかく、「朝(あした)には紅顔ありて夕(ゆうべ)には白骨となる身」などと言いますが、つきなみながら、駒場のことも夢のまた夢の感をまぬかれません。

東京大学(文科三類)に入学したのは1973年の4月です。実のところ、1973年の2月のはじめくらいまで自分は京都大学に行くのだと思っていて、入学試験の願書を投函するばかりになっていました。かねてから京都大学の中国文学に憧れていたからです。ところが、通っていた高校の近所に住んでいた伯母が、普段あまり付き合いもないのに、何を思ったのかとつぜん電話をかけてきて、「東大に行け」とのたまいました。この鶴の一声で東大受験となりました。

大学に受かったときには、漠然とフランス文学をやろうかと思っておりましたが、けっきょく進学するところになると何となくイギリス文学に心が向いていました。何か一つの強い動機があったというわけではありません。とはいえ、そもそも英語が好きでした。高校のころ英語の勉強にと、ディケンズのリトルド版をいくつか読んでいました。しかしそんなことより、小学生のころから漱石を熱愛し、よく読んでいたということがあります。また、同じく小学生のころ、イギリスの児童文学作家であるアーサー・ランサムのお話が大の愛読書でした。よく考えてみると、人生の中で「愛読書」といえるほど傾倒して繰り返し読んだのは、アーサー・ランサム(と漱石のいくつかの小説)くらいです。進学を決めるべきときに「イギリス」が心を占めたのは然るべき流れだったのでしょう。

問題は進学先です。本郷の英文科にしようか、駒場のイギリス科に進もうかと迷いました。漠然とイギリス文学を勉強しようと思っていたので、ほんらいなら英文科です。

しかし、今はどうだか知りませんが、当時は「成績がよければ教養学科」という雰囲気がありました。わが若き胸には大志ではなく、ミーハー精神が横溢しており、単純素朴に、イギリス科に行くのがかっこいいなと思いました。というわけで、英文科かイギリス科か、そこが問題じゃと、軟弱なミーハー男と骨のある学究青年が実存的葛藤に刃を交えました。そこでどうしたか? 双方の研究室をたずねて、それぞれの助手のかたに話をうかがいました。

イギリス科の助手は木畑先生で、具体的にどんな話をされたのかは憶えていませんが、親切にイギリス科に進学することのメリットを教えてくださいました...と思います。これに対して、英文科の助手はXXさんでしたが、イギリス科と比較しての話の流れだったと思いますが「英語だけでできてねえ...。文学的センスがないとねえ」というようなことでした。

そりゃまあ、語学力と文学的センスが両方ともそろっていればよいのだろうが、英語ができないのに英文学が分かるなんてことがありうるのだろうか? ならば文学の勉強をはじめるにあたって、どちらが先かといえば英語のほうではなからうか? 「文学的センス」なんていうけど、大学の研究がそんな文学青年丸出しの、趣味的な話でよいのだろうか? 学問とはもっと理詰めのものではなからうか? 弱冠20歳の小生意気な若造はそんなことを思って、嬉々としてイギリス科を選びました。

はたして、イギリス科は(その気になって真剣に取り組むなら)英語ができるようにしてくれる環境がととのっていました。現在とはちがって必修の語学単位が2か国語で15単位だったので、各学期に3~4コマ語学の授業をとらないことには追いつきません。それに、当時は語学の授業とはいえ文学作品をテキストにすることが多かったので、文学を専攻しようという学生にとってははたして好都合でした。ネイティブの先生の授業も豊富でした。また、語学とはべつに、イギリスの政治、歴史、思想、(そして経済!?)などが必修だったので否でも応でも勉強せざるをえないわけですが、結果的に様々な角度からイギリスを知ることができ、後々とても役に立ったと思います。

こんなことを私などが言うのは身のほど知らずですが、あえてこちたき理屈をお赦しいただくなら、言語の通常の使い方、日常的な使われ方、普通の様態を知らずして、文学を理解することなどできません。文学で学んだ言語だけで文学を語ろうとするのは、漱石の言い方を借りるなら「血で血を洗うようなもの」で、やればやるほどべとべと

してきて、混沌が増殖するばかりです。文学作品が書かれている言語や表現と日常のコトバとの間には、必ずズレや間隙があります。そこから文学的な意味が吹き出しています。そこに文学の意味が構築されています。そして、いうまでもなく、言語の日常的な様態とは、日々の生活や表層の文化をはじめ、政治、経済、思想など深層の文化が語られる言語の総体からできていますので、様々な分野、そこで用いられている言語を学ぶことがすなわち文学の勉強につながります。

イギリス科で学び、教える(すなわち、これまた学ぶ)ことができてほんとうに良かったと思っています。学部時代、英文の大学院時代、そして教員としての期間をすべて合わせると都合38年(残念! こちらはきれいな数字にはなりません!)イギリス科にお世話になりました。イギリス科によりそい、よりかかりながら過ごしたこれまでの人生でした。心よりお礼申し上げます。



## 卒業生の今

### 「帝国の弱さと暴力」

#### 稲垣春樹（55 回）

このたびニュースレターへの寄稿を依頼されました稲垣春樹と申します。イギリス科には 2004 年に進学し、2012 年に博士課程を単位取得退学するまで在籍していました。その後、ロンドン大学キングズ・カレッジで 2016 年に博士号を取得し、現在は首都大学東京の歴史学・考古学教室に助教として勤務しています。ここではイギリス科や留学中の思い出も交えつつ、私の研究について簡単にご紹介したいと思います。

私は 18～19 世紀のイギリス帝国史を専攻していますが、その決定には学部生・院生として受講したイギリス科の授業が大きく影響しています。イギリス史が専門の草光俊雄先生、木畑洋一先生、西川杉子先生、そして本郷の近藤和彦先生の授業はもちろん、人種、宗教、ジェンダー、階級に関するポストコロニアルな研究視角に関心を抱き、真剣に考えるきっかけとなったアルヴィ宮本なほ子先生のゼミなどにおいて、イギリスの文学・文化、社会、政治について様々な観点から勉強できたことは、現在の私の学問的な問題関心の背景となっています。学生時代には、学際的な大学院に所属する院生は専門的な研究手法の習得という点で不利だ、などと考えたこともありましたが、今はそのような環境で広くイギリスについて学ぶことができたことの恩恵を感じています。

ロンドン大学キングズ・カレッジでは、19 世紀前半の植民地インドにおける法と裁判所をめぐる政治史についての博士論文を執筆しました。英国図書館のアジア・アフリカ研究閲覧室にこもって史料を読む生活は大変に楽しいものでしたが、同時に博論執筆中は目の前の史料の読解で精一杯で、駒場で学んだ学際的アプローチを実際に自分の研究に活かすことの難しさも実感しました。イギリス科の学際性に適う研究枠組みの模索は今後の課題です。現在はインド植民地史研究を継続するとともに、博士論文をもとにした著書の出版準備を進めています。また昨年からは、西インド諸島の法と人道主義に関する研究も開始しました。

私の研究の根本にある問題意識は、イギリス帝国はほんとうに強い帝国だったのか、という問いです。一般的に、日本においてもイギリスにおいても、イギリスは産業革命を達成して日の沈まない帝国を築き上げた、という強いイギリス帝国イメージが普

及しているのではないかと思います。強いイギリス帝国と言った場合、それは鉄道や蒸気船、あるいは近代的な教育・医療・法制度の普及といった側面を強調して、イギリスによる植民地支配を肯定的に評価しようとする立場もありえますし、あるいは、イギリスはインドを経済的に搾取するためにインド社会の伝統的なあり方を破壊した、というような否定的な側面を強調する立場もありえますが、いずれの立場も、イギリス人はインド社会を思い通りに作り替えることが可能であった、ということが含意されています。しかしほんとうにそうだったのでしょうか。私の研究は、イギリス人が持ち込んだ法と裁判所を積極的に利用するインド人と、それを全くコントロールできないイギリス人植民地行政官に着目することで、そのような強いイギリス帝国の存在を問い直すとするものです。一貫したヴィジョンに支えられた帝国統治のプロジェクトを遂行する強いイギリス帝国の姿は、現地社会を作り変えて文明化をもたらすのだという当時の植民地行政官の自己イメージにすぎませんでした。植民地支配とは、民衆による反乱を恐れ、在地社会の論理を理解できないままに場当たりの対症療法を繰り返し、自己保身のために暴力に訴えるしかない弱い統治者が生み出した混乱の集積でした。そのようなイギリス帝国の姿は、官民一体となって偏狭なナショナリズムと排外主義を推し進める現代のイギリスそして日本の姿に重なって見えます。強いイギリス帝国という歴史的虚構が排外主義を強化する材料となっている現状を批判するためにも、イギリスによる植民地支配を根底で規定した弱さと暴力について知る必要があるでしょう。そしてそれは、日本帝国の植民地支配に伴う差別・暴力と、その延長線上に存在する現代日本の排外主義について考えるヒントともなるはずですが、過去から現在を捉え返すアクチュアリティを持った研究を目指して、史料分析を続けていきたいと思っています。



The Asiatic Society of Mumbai の前で。

前身である The Literary Society of Bombay はホイッグの大物政治家 James Mackintosh がボンベイの最高裁長官 (Recorder of Bombay, 1804-1811) として赴任した直後に設立した。

## 新教務補佐の挨拶

#### 清水領

2018 年 7 月よりイギリス研究コースで教務補佐を務めております清水領(えり)と申します。私は学部と大学院を本郷の文学部西洋史学研究室で過ごしたのですが、不思議なご縁があって昨年よりイギリス科に務めさせて頂くことになりました。今学期は週二回コモンルームにて勤務しています。駒場は私が教養前期課程を過ごした時から大幅に施設が変わっており、また本郷と駒場とは学内の制度も雰囲気も違うために、勤務を始めた当初はわからないことばかりでした。そのため、主任の小川浩之先生ともう一人の教務補佐の八代憲彦さんに、仕事内容についてだけではなく、イギリス科の風習や歴史についても色々教えていただいています。一年間で行事を一巡り経験して、ようやくイギリス科のことを把握できつつある気がしています。

この原稿を書く直前には、教養前期課程の学生(1-2年生)向けの進学ガイダンスがありました。今までの助手の方々が作られたパンフレットやポスター類を参考にして今年度用の資料を作りながら、イギリス科に進学した皆さんは、なぜこの科を選ばれたのだらうと思いを巡らせていました。私自身は一年間コモンルームに通って、イギリス科の魅力は、日当たりのよい角部屋にある静謐さと、学年の違いなく人が集まっては話し合える温かさだと思っています。学生の皆さんにイギリス科の授業について聞いていると、イギリス科の先生方は非常に丁寧に、優しく相談に乗ってくれるということで、その雰囲気がコモンルームにまで伝わってくるようです。

私の研究内容は、フランス近代のユダヤ教徒社会を対象にしています。イギリスではなく、フランスです。そのため、東大の博士課程の途中からパリにある社会科学高等研究院 EHESS という研究機関のユダヤ学研究室に長期間留学していました。現在も博士課程に所属しています。

フランスに住んでいた時には、イギリスという国は不思議な存在感を放っていました。フランスでは、「イギリスは『ヨーロッパ』ではない」という言説を度々耳にしました。理由を聞くと、こう返ってきました。「イギリスの後ろには旧植民地アメリカが透けて見える。シティーもある。彼らは実利的 pragmatique だ。つまり非常に妬ましい。」もちろん一部の意見だとは思いますが、

ポンドを貫くイギリス側はヨーロッパとの関係をどう考えているのか疑問でした。私自身もロンドンには五回ほど訪れましたが、その都度フランスや他の大陸諸国との違いを感じていました。華々しい二度の戦勝を謳うロンドンの帝国戦争博物館。英ユダヤ人の同化の歴史を誇らしげに語るユダヤ博物館は、ドレフュスの銅像が立つパリのユダヤ歴史美術館とは対照的です。大英帝国の威光を感じさせる大英博物館やヴィクトリア・アルバート博物館。近現代史に限れば、フランス人の感想にも思いいたる所があります。

幸いにも、私自身の研究においても、イギリス科に着任したときから、イギリス関連のことを調べる必要が多々出てきています。たとえばフランス啓蒙思想におけるイギリス経験主義の影響や、ケンブリッジ学派と呼ばれるインテレクチュアル・ヒストリーの史学史について、といった事柄です。せつかくの機会ですので、学生時代のイギリス史の授業を思い返しつつ、イギリス科の方々に話を伺ったりコモンルームの文献を読んだりしながら、自分なりにイギリスとフランスとの関係を整理しようと考えています。

まだまだ教務補佐として至らないところが多く、イギリス科の先生方や学生の皆さんには不便をおかけするかと存じます。今後とも尽力いたしますので、どうぞよろしくお願いたします。また、今年は五年に一回の同窓会が開催されるそうですので、卒業生や関係者の皆さんに、イギリス科を進学先に選ばれた理由について色々とお聞きできれば嬉しいです。



ユダヤ博物館（ロンドン・カムデン地区）



## イギリス科同窓会のお知らせ

来る 10 月 19 日（土）（ホームカミングデー）午後 6 時より、駒場キャンパスで 5 年に一度のイギリス科同窓会を開催いたします。

詳しくは、9 月初旬に改めてご案内いたしますので、みなさま是非、お誘い合わせの上、お出かけ下さい。

尚、ご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）に変更・訂正等おありの方は、卒業生専用アドレス

igirisuka[at mark] ask.c.u-tokyo.ac.jp  
までお知らせ下さい。

このニュースレターを紙媒体で郵送している方には、この機に是非、電子化へのご協力をお願いいたします。



ロンドンのホワイトホールにある戦没者記念碑（セノタブ）。毎年 11 月の「戦没者追悼記念日」に行われる大規模な追悼式典の対象には、イギリス本国の兵士だけではなく、旧自治領や旧植民地（現在のコモンウェルス諸国）の兵士も含まれる。

## 卒業生の方へ 御礼とお願い

イギリス科卒業生、旧教職員のみなさまに毎年お送りしているニュースレターや同窓会のご案内などに必要な通信費は、みなさまからのご寄付に頼っております。お陰様でここ数年は、多くの方の温かいご支援を得て、なんとか資金面の心配をせずに済みました。ここに厚く御礼を申し上げます。

ただ本年は、同窓会の開催などで例年より若干経費が膨らむ見込みです。引き続き、ご支援をご検討いただけますと幸いです。ご賛助いただけます場合は、下記口座までお振り込みいただきますよう、お願い申し上げます。

ゆうちょ銀行  
名義:イギリス科  
口座番号:10090-2-43621671

ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合、口座番号が異なります。

銀行名:ゆうちょ銀行  
支店名:〇〇八店(ゼロゼロハチ)  
口座種別:普通 口座番号:4362167

## 2019 年度 イギリス科運営委員

小川浩之（主任）、後藤春美（副主任）、西川杉子（広報委員）、中尾まさみ（同窓会担当）、アルヴィ宮本なほ子

八代憲彦（教務補佐）、清水領（教務補佐）

## 紙面作成

齋藤優衣（イギリス研究コース 3 年）



テイト・モダンからみるテムズ川